

『かみのくに 地域の由来』

～知っていますか？私たちのまち！～

新
村

上ノ国から天の川流域の開田・開拓に尽力された新村久兵衛を称えて名前をもらい、開拓によって切り開かれた現在の場所を、新村と名付けたとされています。

豊
田

昔は大谷地（オオヤチ：アイヌ語で湿地）と呼ばれる農業に適さない土地でしたが、多くの人の尽力で稲作が出来るまでになったことから、豊作を願い、豊田と名付けられたそうです。

中
須
田

豊田地区や新村地区と同様に、当初は開拓が進んでない地域でしたが、1788年頃、ニシンの不漁から農業への転換のために開拓が始まり、農村が出来たようです。呼び名は、中下や中志田など変遷があったようですが、はっきりした由来はわかっていません。昔は馬産地としても有名だったようです。

小
森

古くはお坊さんの堀がある小さな小屋があったことから小堀（コホリ・コボリ）と呼ばれ、その後、神社が小さな森に囲まれていたことにちなんで小森になったとされています。

桂
岡

昔はアイヌ語でトマツプ（沼の上手の岸边）やトガフ（沼の中に川がある所）と呼ばれていましたが、地名を改める際、杉山と名づけられるところを、現在の愛宕神社の麓に立派な桂の木が生えていたことから、住民が嘆願書をだして、桂岡になったとされています。

早
瀬

当時の宮越から先の木古内へ向かう山道が、「上り四十八瀬、下り四十八瀬」と呼ばれる難所で、道の傍を流れる天の川も急流であったことになぞらえて早瀬と名付けられたと考えられています。

宮
越

昔は立派な松の木が生えていたことから、そのまま「松ノ木」という地名でした。宮越と名付けられた経緯には諸説あり、木古内への道の途中に霊験あらたかな神社が丘の上にあり、「宮を越えて行く」ことから宮越というものと、アイヌ語のイーヤムウシナイ（栗の木の多い沢）がミヤコシになったというものがあります。

湯
ノ
岱

湯の出るタイ（アイヌ語で川沿いの木原）が由来ではないかと言われており、昔から冷泉が出続けている地域だったそうです。江戸時代頃から湯ノ岱と呼ばれていて、林業が主産業だったようです。

神
明

戦後の入植で開拓された地域ですが、開拓される前は人が住んでいない神名ノ沢と呼ばれる沢だったことにちなみ、神明になったとされています。

天の川

このように、私たちの住む上ノ国には、その地域で生きた人々の歴史があり、これまで連綿と続いてきました。

上ノ国は北海道の中でも早い時期に和人が定住し始めた土地でもあり、多くの人たちが地域を支えて今に至ります。

これからの上ノ国を支えるのは、今この地域に住む私たちです。

昔を知るのは、これからを作る上でとても大切なことです。

地域のこれから、上ノ国のこれからのために、歴史を知って、皆で地域のこれからの考えてみませんか？

出典：日本地名大辞典、(角川書店)、アイヌ語辞典(菅野茂)等
画像提供：GOOGLE EARTH

そもそも『上ノ国町』の名前の由来は？

昔、松前から宗谷地方までの日本海側を上ノ国、太平洋側を下ノ国と呼んだことが始まりです。

本町が上ノ国町になったのは、当時、この地が蝦夷地における政治・経済・軍事の中心地だったことから、「上ノ国」と名付けられました。